

PAC 分析の評価査定機能

事前事後テストとして用いた先行研究に関するレビューから

The Evaluation-Assessment Function of PAC analysis

The review on the studies using PAC as pre- and post- tests.

日本女子大学 青木みのり

Japan Women's University Minori AOKI

キーワード：PAC 分析、個人別態度構造、PAC 分析の評価査定機能、事前事後テスト

Key words: PAC analysis, personal attitude construction, Evaluation-Assessment Function of PAC analysis, pre-test and post-test

1. 問題と目的

PAC 分析(Personal Attitude Construction Analysis: 個人別態度構造分析)は、内藤(2002)によって開発された、自由連想法とクラスター分析による質的分析法である。その手順は、①調査対象者に、ターゲットとなる事柄についての連想刺激を教示として与え、その事柄についてのイメージを、自由にカードに書き入れてもらう②連想項目を調査対象者自身にとっての重要度に従い、項目を並べ替えてもらう③連想項目間の類似度を、数字によって評定してもらう④評定値を入力としてクラスター分析を行う⑤調査対象者自身に樹形図の解釈、クラスターの命名、クラスター間の関係や各項目のプラスマイナスイメージの報告などしてもらう⑥以上の調査対象者による考察を踏まえ、実験者が総合考察を行う、となっている。このようにして得られた樹形図とその構造への解釈は、個人の態度の構造を明らかにする点で、優れて個性記述的であるといえる。

井上(1998)は、PAC 分析のカウンセリング導入への効果を、ヴィゴツキーの用語になり3つの領域、11の機能に分類して整理している。第一の直接的な精神間機能分野は、1対1のカウンセリングの場におけるカウンセラーとクライアントの関係に着目した分野であり、導入促進機能、自己開示促進機能、信頼感形成機能、対話発展機能、の4機能に分類される。第二の精神的内機能分野は、クライアント自身の精神世界とその変化に着目した分野であり、共有知識的理解機能、明確化機能、自己理解促進機能、カウンセラー気づき機能、の4機能に分類される。第三の間接的精神間機能分野は、クライアントの内的世界を、第三者にも理解可能な形で提示する、客観的なデータ・資料・査定・評価の道具、いわゆる心理テストの一種としての機能であり、記述記録機能、実務説明機能、評価査定機能、の3機能に分類される。このうち評価査定機能は、クライアントの内的世界がカウンセリング開始時から終結時の2時点でのどのように変化したかについて、いわば事前・事後テスト的にPAC分析を用いてカウンセリングの効果を測定・評価する機能である。

筆者はこの評価査定機能に注目し、従来量的な指標しか用いられてこなかった心理療法のoutcome研究(Hill & Lambert, 2004)において、個性記述的な質的分析法であるPAC分析を用いることを試みてきた(青木, 2008a; 2008b)。その理由としてまず、何を問題と

感じるかや、あるいは心理療法を受けることなどにより「よくなった」と感じる体験は、一人一人異なると思われたことが挙げられる。第二の理由は、これまでセラピスト中心の視点であった心理療法研究(Bohart, 2005)に対し、クライアントの視点からの検討を加えたいと考えたことである。そして第三の理由は、心理的な問題は個人の世界への認識に関連するという Watzlawick(1978)の指摘から、心理療法等を通じて問題が解決するとき、個人の世界観やそれに基づく世界との関わり方といった、質的で動的なプロセスが変化すると考えられ、それは量的で静的な指標によっては表わすことが難しいと思われたからである。

すなわちクライアント固有の、主観的な視点から、生きる主体としての活動を含む治療的改善を検討する必要があるといえる。PAC 分析は一人一人のイメージや態度を測定することができ、態度とは、刺激と行動とを媒介するものでもある(内藤, 2008)ため、心理療法の outcome 測定法として適していると考えられる。半面、個別の態度を測定するものであるため、事前事後という2つの時刻における態度構造を比較する場合、比較の質を一定に保つために、どこに着目するかについての詳しいガイドラインが必要になる。さらに複数の個人の変化の類似点や相違点を捉える場合も同様である。

そこで本稿では、PAC 分析の評価査定機能における比較のための指標について、検討を行う。

2. 先行研究

まず、これまで行われてきた研究において、事前事後テストとしての PAC 分析によって描き出される変化がどのようなものであるかを概観し、その中で検討されてきた比較の視点についてまとめる。

CiNii データベースにおいて「PAC 分析」「態度構造」をキーワードとして検索し、次にその中から1人の調査対象者に対して2つ以上の時点で PAC 分析を行っているものを選択した。さらにデータベース上にないものも参考文献等から探し出して加え、最終的に20の文献を得た。

また、各論文において「被験者」「実験協力者」など、調査の対象となる人を表す表記は異なるが、本稿ではこれを一括して「調査対象者」と表記することとした。

(1) 連想項目

① 連想項目の示すもの

一人の調査対象者に複数回の PAC 分析を行うと、連想項目が変わることがほとんどであり、むしろ同じ項目が現れることは珍しい。よってまず、項目の内容そのものの変化を検討する必要がある。

また同じ項目が表れても、その意味合いが異なる場合がある。青木(2008b)では、カウンセリングを受けることにより、問題のとらえ方がどのように変化するかについて事前事後 PAC 分析による検討が行われている。調査対象者 A において、事前では具体的な困りごとが散在している印象であったが、事後では項目の抽象度が上がり、以前より距離を置いてとらえていることが見出される。また、問題となっていた「面倒」という項目が、事後テストでは「めんどろ」とひらがな表記になり、重要度も10項目中4から7項目中7

へと変化している。「距離は遠く、やわらかくなった」と説明され、イメージが変化したことが示された。

同様に八若(2008)の調査対象者 B でも、日本語学習者にとっての「漢字」が、最初はなかなか習得できないものであったが、1年後には「勉強によって解決できる」と前向きに変わったことが示されている。このように、同じ単語でもその意味が変化することが見出される。表記やコンテキストの説明に関心をむけることが重要である。

②項目同士のつながり

項目同士のつながりにも変化が見られる。八若(2008)では同じ「漢字」が事前事後で表れても、それと結びつく項目が異なってきており、調査対象者にとって漢字の占める位置や、その意味合いが変わっていることがうかがえる。

③連想項目数

項目の数が意味するものは多様である。一般に PAC 分析への動機づけが低かったり、連想の対象に対する興味が薄かったり、或いは、あまり気にならなくなっている、といった場合には項目数が少なくなる傾向がある。逆に多い場合は、取り組みが熱心であったりイメージが豊富な場合もあれば、とらわれが強い場合、散漫でまとまらない場合も見られる。一例として青木(2008b)の調査対象者 A では、最初の問題にとらわれている状態では困ったことの羅列になり項目数が多くまとまらない印象であったが、2回目に問題が気にならなくなると、抽象度が上がるとともに項目数も減っている。よって項目数の変化により、調査対象者の動機づけ、連想対象への距離感やとらわれの一端をうかがい知ることが出来る。

(2)クラスターの構造

①クラスターごとの比較

友生・今林(2001;2002)、友生(2002)では、子どもが友人関係をどのように捉えているかについての PAC 分析を行ったところ、各クラスターが友達との関係のタイプと対応している。そのため、教師からのかかわりを含んだ学校生活を通して、子どもが友人として選ぶ相手のタイプが変化していることがわかる。このように、各クラスターが同一レベルに属するカテゴリーを形成していることもあり、そこから調査対象者が他者や自分の住む世界をカテゴライズしていることや、カテゴリーの内容の変化を知ることができる。

一方、青木(2003)は教師コンサルテーションの事例において、子どもに対するイメージがコンサルテーションにおいて「自分の感情」「相手への感情」「教師としての自分の立場」というヒエラルキー構造を示すこと、さらに対応する各層のイメージがコンサルテーションの前後でネガティブからポジティブに変化していることを示した。このように各クラスター間の関係が同一レベルではなくヒエラルキーを維持しながら変化する場合もある。なおこの研究は、事後の想起であるために厳密には事前・事後テストではないが、調査対象者が世界を階層構造でとらえていることや、その内容の変化を知ることができる。

またクラスターごとの比較が可能な場合は、カテゴライズするレベルが変わらないということも表しているといえよう。

②クラスター構造、クラスター同士の関係

内藤(1993a)による就職活動への態度変容に関する研究では、就職活動を通じて、あるいは実際に就職が近づくことにより、クラスターの構造やその関係が変化することが示さ

れている。5人の調査対象者に共通しているのは、最初はイメージとして描く就職や、現在の学生生活の中での就活の大変さであり、やがてそれが現実将来に向かっての準備状態や不安・覚悟・期待へと変化する点である。しかしどのような変化が生まれるかは一人一人違っている。

例えば女子 A は、年度始めには就活の始まった現実生活に適応するプロセスで、それぞれの局面が構造化された状態から、年度末には就職のイメージのプラスマイナスそれぞれの側面が構造化され明確になっていることがわかる。このように、クラスター内の項目が整理されると共にクライアントの視点が整理されることも見出される。

一方女子 B では、年度当初に「就職＝学生生活との決別」を惜しむクラスターが含まれ、年度末には期待とともに不安、厳しさや責任への予測が構造化され、こうした情緒面での構えが強い状態であることが伺える。また男子 C では、年度当初は就職に対し大人になることとそれに伴う不安が構造化され、年度末には将来に向かって時間的な展望が構造化されている。見知らぬ社会に不安を抱きながらも、しなければならぬことをこなしていく堅実で慎重な態度が構造に現れている。男子 D は、全体の構造として就活に対する具体的な対処法をイメージしている状態から、社会の一員としての様々な局面が構造化される状態へと変化している。

郷式(2003)は、3名の母親を対象として赤ちゃんのイメージについての PAC 分析を行い、その構造の変化に注目している。ここでは、母親が出産前から出産後にかけて現実的な適応をし、出産後の赤ちゃんへのイメージにおいてもプラスマイナスのバランスをとろうとしている点で、共通した傾向が見られながらも、その一人一人がユニークなイメージ構造を持ち、適応のしかたやバランスの取り方も人それぞれである点が見出されている。

八若(2007)の韓国人留学生への調査において、調査対象者 B では、前後でクラスターがおおむね対応しながら、その内容が変化している。これは、2つの時点で問題が日本語の「理解」から「運用」へと移るに伴い、日本語学習が意識される状況も変化しているためであり、クラスターの命名にもそれが表れている。調査対象者 A でもクラスターの対応が見られる。

新館・松崎(2006)では、一人の新任教師に対して1年に4回(うち1回は PAC 分析実施に関するもの)の追跡的調査を行っているが、その時期ごとの生徒や教師との関係のイメージの変化がクラスターやそのつながりの変化に表れている。

以上のことから、就職や出産、留学や指導経験を経るというコンテキストの変化に伴い、問題となる側面や、自身の内面で意識される面が変化しているといえる。クラスター構造という面からみると、現れるクラスターそのものが変化することは、対象のどこに関心を向けてとらえているかが変化していることを示している。例えば内藤(1993b)は、「解釈内容は、潜在的に存在する多くの事実の中で、どの側面に視線が注がれ、何を事実として体験するかという、調査対象者自身の体験様式そのものを示している」と指摘している。また半原(2008)は、重要項目が多く含まれる重要なクラスターが変化することで、その人にとって最も関心が向いている領域が変化していることがわかると述べている。

クラスター構造の変化は、前節のクラスターごとの比較が可能な場合と比べると、カテゴリの仕方やヒエラルキー化の仕方そのものが変化しているといえ、その意味でより大きな変化といえるかもしれない。

(3)全体としての態度構造

クラスター構造の変化は、全体としてみると安ら(1995)や藤井(2004)が述べるように、その人の準拠枠の変化を表していると考えられる。これら2つは教育場面における変化の研究だが、準拠枠として捉えることは、教育の効果としての認知面における変化を明確にすることを可能にすると考えられる。

矢野(1999)は不妊相談の4回の面接で毎回PAC分析を用い、クライアントの根源的ともいえる悩みの変化を描き出している。このようにクライアントの意識レベルには現れないものも扱える可能性を井上(1998)が指摘している。

これに対し、堀内ら(2006)は、3名の看護大学生の「死に対する態度構造」を調査し、実習を通じて変化することを見出している。卒業時には、死を現実のものと認識し、受け止めつつある傾向がみられるが、担当患者の死を経験した場合と異なり、自分自身の死については言及されず、感情認知レベルの変化にとどまり、価値観レベルの変化は起きていないことがわかる。このように、樹形図に表れていない側面に着目することによっても、重要な変化を見出すことができる。

井上(1997)による留学生の文化的受容態度の変化の検討では、クライアントの態度構造が、留学生活・経験およびカウンセリングを通じて、「分離」から「統合」へと変化している。これは、クライアントの価値観レベルの深い変化が起こっていることを示している。

一方新館・松崎(2006)では、生徒や教師、学校へのイメージが変化する中で、指導方法そのものは変化しながらも、「生徒にいていねいにかかわる」姿勢は変わらず続いていることが示唆されている。

このように、態度構造全体の変化を見ることは、認知面を含めた変化のレベルについて見ることも可能にする。

(4)項目およびクラスターのプラスマイナスイメージ

松崎(1997)、松崎・田中(1998)は不登校児の合宿の前後の比較を行っているが、その際にプラスのイメージが増え、マイナスのイメージが減ることを見出している。井上(1997)でもカウンセリング終結時に以前の否定的なイメージがないことが見出されている。今野・池島(2007)のピア・サポート活動の研究では、項目だけでなくクラスターについてもイメージ評定を行い、マイナスが減りプラスが多くなっていることが報告されている。これはやはり、調査対象者のとらえかたが変化し、「よくなった」と感じられていることを示しているといえよう。このように第三者ではなく調査対象者自身にとって良いものか悪いものかという評価である点、その評価の基準を個別に示すことができる点が、PAC分析の特徴でもある。このような変化は、他の研究においても数多く見られる。

(5)クラスター間・及び項目間の動的関係

PAC分析では、固定した態度の構造とともに、項目やクラスター同士において、動的な関係が示される点が特徴的である。事前事後テストとして施行することにより、こうした動的関係の変化も明らかにすることができる。これらの動きは、視覚的なつながりからだけでは見えにくく、調査対象者による解釈によって明らかにされることが多い。

①因果関係

八若(2007)の調査対象者Aにおいて、「会話ができる」ので「日本語の勉強のやる気がない」という項目間の因果関係、及び[日本自体への理解]が高まったので[最近気づいた悩

み]がある、というクラスター間の因果関係がみられる。非母語話者と母語話者との交流に関する研究(半原, 2008)では、さらに、「クラスター3における凶悪犯罪者=外国人というイメージが出来上がると、クラスター2のような交流会への参加も減るかもしれない」という、クラスター間の因果関係が危惧されている。

②個人間相互作用、個人内相互作用

個人は自らを取り巻く世界の中で、事象を認識して、意味付けたり感情を抱いたりする。そこからまた新たな認識や行動が生じる。これを個人間相互作用、個人内相互作用とすると、青木(2008a)では、職場の苦手なひとについての相談において、1回目では「苦手な人の行動が目について、否定的な感情が喚起される」個人間・個人内相互作用が見られたが、2回目では「自身の心の内面に目を向け、他者に惑わされずバランスを保つ」個人内相互作用を重視し、その維持に自分自身が主体的に関与する状態へと推移していることが示された。

③認識した事実への働きかけ、主体性の変化

上記の個人間・個人内相互作用の変化は、認識した事実すなわち世界観への働きかけという視点から見ると、主体性の変化ととらえることができる。

井上(1997)では留学生カウンセリング事例において、1回目 PAC 分析で[エイリアンとしての私]であるという認識がまずあり、それに対して[努力]していたクライアントの姿勢が見える。このような[異文化適応の努力]を伴う留学生活・経験を通して、2回目 PAC 分析の統合への態度変容が起こっているとみられ、そこには項目・クラスター間の「認識したことを改良しようという努力による関わり」という主体性が表れており、そこから作り出される大きな流れとしての1, 2回目の間の変化とつながりがみられる。

半原(2008)では1回目の PAC 分析において、「日本人と中国人がお互いの国の文化を認識することが、いい悪いではなくそれはそういうものであると理解することにつながる」「所得格差を認識することが外国人の凶悪犯罪の増加につながる」という個人間・個人内相互作用が示されている。ここには自身の主体的な関わりはまだ意識されていないが、2回目では、「黙っていては何も伝わらない」という認識から、「自分から踏み出す気持ち」つまり感情が生まれ、「自分から行動を」という行動レベルへとつながっている。ここには個人間・個人内相互作用に伴う世界への働きかけが主体的に変化したことが示されている。

(6)調査対象者自身による解釈

このような前後のイメージとその変化が、ともに調査対象者自身によって分析される点が、PAC 分析の大きな特徴の一つでもある。内藤(2002)が述べるように、項目やクラスター、およびクラスター間の関係の意味は、調査対象者自身でなければわからないことも多い。2時点での変化も同様と考えられる。よって、2回の PAC 分析の違いについての感想を求めることも大切であろう。そしてそのこと自体、調査対象者の利益につながることもあると思われる。

3. 考察

PAC 分析を事前事後テストとして用いた先行研究を概観した。これを踏まえ、また内藤の考察(2002; 2008)を参考にして、以下に PAC 分析の評価査定機能の留意すべき視点について考察する。

なお検討にあたって、個別の態度構造が PAC 分析の対象であり、なおかつこれまでの研究は多方面にわたっていることから、俯瞰する視点はこちらを包括するために必然的に領域に特化しない抽象度の高いものであるべきと考え、留意した。

(1) 留意すべき視点のまとめ

①連想項目への着目

1) 項目の内容そのものの変化：内藤(2008)によれば、新たな独立変数や従属変数を発見することが可能であり、それが事前事後で変化しうる。

2) 項目全体の抽象度の変化

3) 項目数の変化

4) 項目のプラスマイナスイメージの個数の変化

5) 消える項目、新たに現れる項目：消える項目はおそらく関心を向けられなくなったか、逆に向けないようにしている可能性もある。現れる項目は新たに意識に上る項目である。

6) 同じ項目の変化：ア) 項目にまつわるイメージの変化、イ) 表記の仕方の変化、ウ) 重要度の変化、エ) プラスマイナスイメージの変化、などの留意点が考えうる。

7) 項目同士の結びつき方：とくに同じ項目が再度現れた場合、その意味合いとともに、結びつく他の項目も異なることがよくある。これは、項目が意識の中で占める位置や、その背後にあるコンテキストが変化したことの指標と思われる。

②クラスター構造への着目

1) クラスター同士の対応に着目し、対応するクラスター同士を比較する。

2) ヒエラルキー構造が事前事後で保存される可能性があり、この場合はヒエラルキー同士の対応に留意する。

3) 1)、2)は、調査対象者が対象をとらえるにあたって行うカテゴリー化のレベルが、前後で変わらないことのあらわれとも考えうる。

4) 消えるクラスターや現れるクラスターと、その意味

5) クラスター同士が対応しない場合が多いが、この場合は、クラスターの意味や複数クラスターのまとめりとして現れる意味に着目する。それは、調査対象者がその時点で関心を向けている内容を表している。

6) クラスターのプラスマイナスイメージの変化：クラスター内の項目のプラスマイナスの変化は、クラスターのイメージの変化を示すとともに、クラスター内のイメージが統一されたり整理され、落ち着くことの指標でもある。また、葛藤度(内藤,2008)の算出も可能である。

7) クラスター内の重要度の変化：クラスターそのものの重要度、クラスター内の整合性。

8) クラスター同士の関係の変化にも着目する。ヒエラルキー構造かそれとも並列関係か、といったことなどが、前後で変化することもある。

③態度構造全体への着目

1) その人の準拠枠

2) 感情、認知、価値観などの変化のレベルを見ることができる。

3) 意識的には表れない変化も、全体を見渡すことにより明らかになる。

4) また、樹形図に表れていない部分も視野に含み、その変化をもイメージすることも可能である。

5)全体を通して共通するもの、不変なものにも注目する。

④項目及びクラスターの動的関係

内藤(2008)によれば、PAC分析では刺激と行動を媒介するものとしての態度を分析対象としており、項目やクラスター同士の関係はスクリプトとして解釈できる。また、結節のプロセスは、因果関係を示唆しており、それは調査対象者の報告と合わせて推論することができるという。

言い換えれば、PAC分析には項目やクラスターのつながりに時間的・空間的な推移を含意した関係が現れうる。そこでこれに着目することにより、

1)事象を認識して、何らかの働きかけをする。(主体性、世界との関わり)

2)事象を認識して、意味付けたり感情を抱いたりする。そこからまた新たな認識や行動が生じる。(個人間相互作用)

3)自分自身の内的なプロセスとしての思考や感情(個人内相互作用)

4)時系列の出来事

5)原因と結果の関係(因果関係)

が明らかになることが示唆される。とくに1)~3)は一つの出来事の異なる側面として同時に起こることが多い。

⑤調査対象者自身による解釈

PAC分析では、調査対象者自身でないとわからないことも多い。そのため、感想などの形で、変化について尋ねることが有用である。

(2)総合考察

まず、3.(1)の考察より、①~③は主に態度の構造の変化をとらえる視点であり、④はプロセスの変化をとらえる視点であるといえるだろう。もちろん、この2つは同時に存在しているのであり、分離することは不可能である。だからこそ、これらを同時に、しかも個人に即して表現することが不可欠なのであり、それがPAC分析によって可能となることが示された。

構造と動きを同時に表現でき、なおかつ複数の動きを同時に表現することも可能なため、自分を取り巻く世界に対する個人の認識すなわち世界観(Watzlawick, 1973)と、その世界との相互作用、複数の個人間・個人内相互作用とを同時に表現することができる。Wachtel(2004)が述べるように、個人の外的・内的相互作用は相互に関連し合っており、分けて論ずることはほとんど不可能である。PAC分析はそれを同時に、しかも総合的にあらわすことができる。

筆者の目的は、心理療法などによって問題が解決したとき、クライアントの世界との関わりがどのように変化するかを描き出すことであつた。世界との関わりには、世界をどのように見、どのように働きかけるか、ということが含まれる。それは具体的には、問題をめぐって、そこにかかわる人々との相互作用や、その時自分自身がどのように感じ考え行動するかという内的相互作用となって現れる。また、この先の見通しや希望という時間的な展望としても現れる。こうした点をとらえるために、PAC分析は事前事後テストとして今までにない優れた側面を持つ方法であることが示された。

(3)今後の課題

以上の視点はPAC分析の解釈という点からは特に新しいものではないと思われるが、

視点を整理しておくことにより、時によりまた実施者によって視点が異なってしまうことを回避することができる。

今回の印象として、事前事後テストとして使用する際にも、その変化をどこまで探究するかが、研究によってさまざまだったことが挙げられる。スクリプトの解釈まで行われていた研究は一部であった。各研究の目的などにも依存するであろうと考えられ、目的に合った探求がなされることが有益と思われた。

今回の調査の課題点として、20 という少ない文献による考察であった点が挙げられる。データベース上になく、今回の対象とならなかつた文献も存在するであろう。また文献数の少なさは一つには、事前事後テストとしての PAC 分析がまだ未開拓であることを示しているともいえる。今後は、プラスマイナスイメージや項目数、クラスター数などに基づいた量的指標も検討されていけば有益であろう。井上・伊藤(2008)が指摘するような倫理的な問題にも十分留意しつつ、事例に当たりながらさらに改良を加え、より優れたものに練り上げていきたいと考える。

[文献]

安龍洙・渡辺丈夫・才田いづみ (1995) 韓国人日本語学習者の授業観の分析：授業に対する認知的変容についての事例的研究 東北大学文学部日本語学科論集 5,1-12(東北大学).

青木みのり (2003) 教師コンサルテーションの一事例に関する考察～問題解決過程を通じての自己概念および指導行動の変容のプロセス. 専修人文論集, 73, 1 - 27.

青木みのり (2008a) 心理療法の成果に関する PAC 分析を用いた事例検討—個人内相互作用と個人間相互作用の変化に着目して. お茶の水女子大学人間文化創成論叢, 10, 217-227.

青木みのり (2008b) 心理療法における問題の見方の変化に関する検討：PAC 分析を用いた質的研究. ブリーフサイコセラピー研究, 16, 2, 95-108.

Bohart, A. C. (2005) The Active Client. In J. C. Norcross, L. E. Beutler, & R. F. Levant (Eds.), *Evidence-Based Practices in Mental Health: Debate and Dialogue on the Fundamental Questions*, 218-225. Washington: APA.

藤井和子 (2004) PAC 分析を利用した養護学校新任教師の自己研修法の検討. 上越教育大学研究紀要, 24, 89-97

郷芝薫 (2003) 母親は赤ちゃんをどうイメージするか? : 出産前後の PAC 分析の変化. 人間文化研究科年報,19,163-180(奈良女子大学)

八若壽美子 (2007) 韓国人学部留学生の日本語学習における自己評価の変容. 茨城大学留学生センター紀要, 15, 41-52.

半原芳子 (2008) 「対話的問題提起学習」が母語話者参加者の積極的共生態度に及ぼす影響—PAC 分析を用いた事例検証—. 世界の日本語教育, 18, 147-162.

Hill, C. E., & Lambert, M. J. (2004) Methodological Issues in Studying Psychotherapy Process and Outcome. In M. J. Lambert (Ed.), *Bergin and Garfield's Handbook of Psychotherapy and Behavior Change* (5th ed. 84-135). New York: Wiley.

堀内宏美・奥祥子・中俣直美・塚本康子・牛尾禮子 (2006) 看護大学生の死についての態度構造の縦断的研究. 福岡県立大学看護学部紀要, 3, 65-73.

井上孝代 (1997) 留学生の文化受容態度とカウンセリング：PAC 分析による事例研究を通して. カウンセリング研究, 30, 216-226.

井上孝代 (1998) カウンセリングにおける PAC (個人別態度構造) 分析の効果. 心理学研究,

69, 295-303.

井上孝代・伊藤武彦 (2008) PAC分析の活用の意義と課題 心理学紀要(明治学院大学), 18, 47-56.

今野博信・池島徳大 (2007) 個人別態度構造(PAC)分析によるピア・サポート活動の効果測定
の検討—大学生による中学生へのピア・サポート活動を対象にして—。ピア・サポート研究, 4,
19-26.

松崎学 (1997) サポート介入による個人の対処行動の変容過程に関する研究. 平成 7-8 年
度文部省科学研究費補助金(基盤研究 C) 課題番号 07610157, (代表者:松崎学) 研究成果報告
書.

松崎学・田中宏二 (1998) 対人ストレスをもつ児童への合宿によるサポート介入の効果とその
母親へのサポートシステム変革へ向けての介入の効果に関する研究. 平成 7-9 年度文部省科学
研究費補助金基礎研究(B)(1): 課題番号 07301012, (代表者:田中宏二)「健康防御への社会
的支援介入法の適用に関する総合研究」研究成果報告書, 30-59.

内藤哲雄 (1993a) 職業への態度と変容の個人別構造分析. 日本社会心理学会第 34 回大会発
表論文集, 46-49.

内藤哲雄 (1993b) 個人別態度構造の分析について. 人文科学論集(信州大学文学部), 27,
43-69.

内藤哲雄 (2002) PAC 分析実施法[改訂版]. ナカニシヤ出版.

内藤哲雄 (2008) PAC 分析を効果的に利用するために. 内藤哲雄・井上孝代ほか(編) PAC
分析研究・実践集 1, ナカニシヤ出版, 1-34.

新館啓一・松崎学 (2006) PAC 分析による新任教師の振り返りの効果— 1 年間の追跡的調査
を通して—. 山形大学教職・教育実践研究, 1, 73-83.

友生 雅夫・今林 俊一 (2001) 児童の友人関係に関する個人別態度構造の分析. 鹿児島大学教
育学部教育実践研究紀要, 11, 55-63.

友生 雅夫・今林 俊一 (2002) 児童の友人関係に関する個人別態度構造の分析(2). 鹿児島大
学教育学部教育実践研究紀要, 12, 61-67.

友生 雅夫 (2002) 児童の個人別態度構造の変容についての研究(3): クラス編成後一年間の
友人関係の変容の分析, 日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集, 313.

矢野恵子 (1999) 不妊相談におけるPAC分析手法の活用効果の検討 治療経過に伴う不妊症の
捉え方の変化. 三重看護学誌, 1, 25-38.

Wachtel, P. L. (1993) *Therapeutic Communication — Knowing What to Say When*. New
York: Guilford Press. (杉原保史 訳(2004) 心理療法家の言葉の技術—治療的なコミュニケ
ーションをひらく. 金剛出版)

Watzlawick, P. (1978) *The Language of Change — Elements of Therapeutic
Communication*. New York: Norton. (築島謙三 訳(1989) 変化の言語—治療的コミュニ
ケーションの原理. 法政大学出版局)